民家と工業化住宅の動的把握

－蔵田周忠のインターナショナリズムとリージョナリズムにみる日本におけるトロッケン・モンタージュ・バウの受容展開過程に着目して－

【目次構成】

〔序論〕

第一章　本研究について
- 1-1. 研究背景
- 1-2. 研究意義
- 1-3. 研究目的
- 1-4. 研究方法
- 1-5. 論文構成
- 1-6. 既往研究

〔本論〕

第二章　本研究における民家と工業化住宅
- 2-1. 民家と工業化住宅の定義
- 2-2. 工業化住宅の類型と変遷
- 2-3. ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳの受容展開過程における定説
- 2-4. ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳと乾式構造の関係性
- 2-5. 乾式構造に関連する作品紹介
- 2-6. 小結

第三章　1920 ～ 3 年代の建築思潮とﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳ
- 3-1. 近代建築思潮の日本への紹介者
- 3-2. ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳの成立背景
- 3-3. ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳの日本への紹介
- 3-4. ﾓﾀﾞﾆｽﾞﾑにおける近代思潮と日本伝統の統一視
- 3-5. 小結

第四章　ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳと乾式構造の展開
- 4-1. ﾜﾙﾀｰ・ｸﾞﾛﾋﾟｳｽによるﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳ
- 4-2. 市浦健と土浦亀城による乾式構造
- 4-3. 蔵田周忠による後発乾式構造
- 4-4. 市浦健・住宅営団による木製ﾊﾟﾈﾙ式組立住宅
- 4-5. 前川國男によるﾌﾟﾚﾓｽと浦辺鎮太郎によるｸﾗﾀｹﾝ
- 4-6. 住宅ﾒｰｶｰによる初期ﾌﾟﾚﾊﾌﾞ住宅
- 4-7. 日本におけるﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳ受容展開過程の実態
- 4-8. 小結

第五章　乾式構造の展開と生産力
- 5-1. 主材料における鉄骨と木造の相違点
- 5-2. 市浦健と土浦亀城の乾式構造にみる木造
- 5-3. 蔵田周忠の乾式構造にみる木造と亜鉛引鉄板ｼﾞｮｲﾅｰ
- 5-4. 木製ﾊﾟﾈﾙ式組立住宅にみる木造と木工機械
- 5-5. ﾌﾟﾚﾓｽ・ｸﾗﾀｹﾝにみる木造と軍需産業
- 5-6. 初期ﾌﾟﾚﾊﾌﾞ住宅にみる冷間形成軽量形鋼と鉄鋼業
- 5-7. 生産力にみる乾式構造の成立背景
- 5-8. 小結

第六章　考察・民家と工業化住宅の動的把握
- 6-1. 日本におけるﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳの受容展開過程
- 6-2. 蔵田周忠のｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾘｽﾞﾑとﾘｰｼﾞｮﾅﾘｽﾞﾑ
- 6-3. 民家と工業化住宅の動的把握
- 6-4. 小結

〔結論〕

第七章　結論

謝辞 / 参考文献 / 図版出典 / 巻末資料

序論

第一章　本研究について

1-1. 研究背景

日本建築史において、近世と近代には画然たる開きがあるという指摘がある。[1] 一方で民家と工業化住宅の間に関係性があるという指摘を以下の人物が行っている。[2]

Bruno Julius Florian Taut / Walter Adolph Georg Gropius
Le Corbusier / Bernard Rudofsky /Nicholas John Habraken
蔵田周忠 / 土浦亀城 / 岸田日出刀 / 市浦健 / 渡邊保忠
川添登 / 内田祥哉 / 内藤昌 / 松村秀一

つまり、この民家と工業化住宅の間に孕む関係は何か、を足掛かりとすることを本論の出発点とする。

1-3. 研究目的

研究背景・意義より、乾式構造・モダニズム・民家が交錯する 1930 年代前後を中心に、蔵田周忠を通して、工業化住宅の前史を明らかにすることをきっかけとする。

つまり、本研究では、蔵田周忠を通してみる、日本におけるトロッケン・モンタージュ・バウの受容展開過程に着目して、民家と工業化住宅の動的把握を明らかにすることを目的とする。

1-4. 研究方法

本研究では、以下 3 つのテーマを取り扱うこととする。

①日本における ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳ の受容展開過程
②蔵田周忠にみる乾式構造の特徴
③民家と工業化住宅の動的把握

1-4. 論文構成

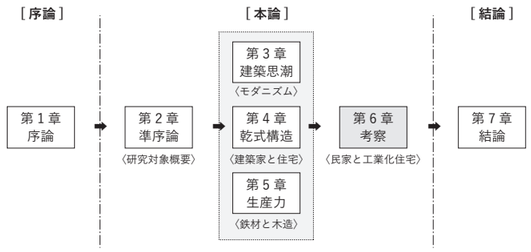

図 1　論文構成のダイアグラム

1-5. 既往研究

・近日本建築学会『工業化戸建住宅・資料』(彰国社 ,1983)
・松村秀一『工業化住宅・考 これからのプレハブ住宅』(学芸出版社 ,1987)
・矢木敦・大川三雄「蔵田周忠の住宅設計活動について－乾式工法住宅を中心とする考察－」(日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東)1997 年 9 月 pp.59-60,1997)
・「蔵田周忠 等々力住宅を中心にして」『都市住宅』No.7307(鹿島出版会 ,1973.7)

本研究は、乾式構造研究･蔵田周忠作家論ではない。主眼は、今まで対象とされなかった蔵田・受容過程を基に、その成立背景と連続性・動的性を明らかにしようとするものである。

本論

第二章　本研究における民家と工業化住宅

2-1. 民家と工業化住宅の定義

本研究では、既往研究より以下のように定義づけを行う。

［民家］－地方的、前近代的、伝統的な、ハードな技術的側面とソフトな社会的仕組みの側面を合わせもつ家。
［工業化住宅］－都市的、近代的先進的な、ハードな技術的側面とソフトな社会的仕組みの側面を合わせもつ住宅。

2-3. ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳの受容展開過程における定説

工業化住宅に関連するものと言っても、様々であるが [3]、既往研究 [4] より変遷をまとめると右図になる。本研究では、これら住宅作品を研究対象とする。

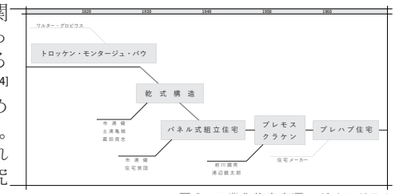

図 2　工業化住宅変遷のダイアグラム

2-6. 小結

定説では、「ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳが日本に紹介され、これに触発されたことで日本の工業化住宅が始まった」とされ、「日本では民家と工業化住宅に関連はなく、真新しい海外技術により始まった」という認識である事を確認した。

第三章　1920 ～ 30 年代の建築思潮とﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳ

3-2. ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳの成立背景

近代先端思潮を背景にﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳは成立した。[5] 日本への紹介に蔵田は重要な役割をしていた。[6]

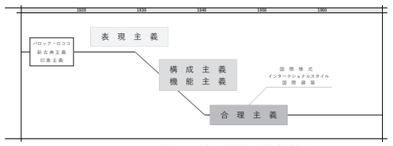

図 3　近代建築思潮変遷のダイアグラム

3-4. ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳ の日本への紹介

日本へは雑誌などを通して紹介されたが、紹介を受けてからの実作でなく、「紹介と実作が同時に掲載」されていた。

・川喜田煉七郎「C バウハウス提案の住宅型」『建築新潮』[7]
・松本政雄「ワ・グロピウスの第十七號の家」『国際建築』[8]
・市浦健 / 土浦亀城 / 蔵田周忠『国際建築』[9]
・土浦亀城「トロッケンバウの実例」『建築工芸アイ･シー･オール』[10]

3-4. モダニズムにおける近代思潮と日本伝統の統一視

モダニズムの中で、「欧州の近代先端思潮と日本伝統を統一視」する不思議な潮流が存在していた。[11] 主に以下の建築家が、当時、この話題に触れている。

コルビュジェ / ワルター・グロピウス / ブルーノ・タウト /N.J. ハブラーケン /B. ルドフスキー / 蔵田周忠 / 市浦健 / 土浦亀城 / 岸田日出刀

3-6. 小結

乾式構造実践者は、当時の海外と日本の建築の背後にある**生活改善**という情勢を把握しつつも、**欧州先端思潮と日本伝統を統一視**する動きも認識していた。この中で、**ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳの紹介と自身の実作紹介を同時に発表**していたことが明らかになった。つまり「海外だけでなく、日本の社会情勢や建築思潮の両面を把握し､実践していた」ことになる。

第四章　ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳと乾式構造の展開

4-3. 市浦健と土浦亀城による乾式構造

ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳと日本の乾式構造には､軸部が｢鉄材｣に対して｢木材｣という決定的な相違点があった。[12] これは、単なる「模倣」ではないということを意味する。ここで両氏の言説 [13] により、共に「生活改善と住宅改良」を目的に乾式構造に挑んでいた事が確認できた。つまり、単なる模倣ではなく、生活改善・住宅改善の最善の方法として、実験的実践を行っていた。そして、その背景には、近代先端建築と日本伝統建築の合理性における類似性を認識していた。

4-4. 蔵田周忠による後発乾式構造

蔵田の乾式構造への姿勢は、市浦・土浦と同様であった。しかし､蔵田独自の建築活動を背景に､これが特に顕著であった。蔵田は､海外渡航や国際関連記事の雑誌への投稿など｢近代建築思潮｣に対して敏感に反応していたが、その他に､｢民家研究｣の活動 [14] も実践し､｢民家・民藝・工藝｣にも多大な興味を示していた。そして、民家を史的・遊戯的なものとしてでなく、民家及びその生活に関心を持ち、将来の民家を検討していくことを強く意識していた。[15] つまり、乾式構造に挑む姿勢として、市浦・土浦より､「日々変化する生活に対して日本の気候風土に即した住宅－民家」として、実験的に行っていた。

4-7. 日本におけるﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳ受容展開過程実態

その後の住宅営団による組立住宅、前川國男・浦辺鎮太郎による組立住宅、初期プレハブ住宅も同様に、ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳに影響を受けてはいたが、それ以上に当時の生活改善から日本人自らの努力として、実践されたものであった。

4-8. 小結

日本における乾式構造は、「ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳの単なる模倣ではなく、日本人建築家自らの努力として、当時の生活改善・住宅改良を目的に、実験的実践」を行っていた。その後もこの動向は同様で、特に顕著であったのが、今まで着目されていなかった｢蔵田周忠｣であることが明らかになった。

第五章　乾式構造の展開と生産力

5-2. 主材料における鉄骨と木造の相違点

乾式構造を中心に、昭和 30 年代プレハブ住宅まで｢木造｣であった。これは、意匠計画の意図でなく、当時の生産力の脆弱さが起因していた。鉄骨を使わないのではなく、木材を使わざるを得なかったので、模倣できなかったのである。[17]

5-6. 初期ﾌﾟﾚﾊﾌﾞ住宅にみる冷間形成軽量形鋼と鉄鋼業

では、なぜ突如として鉄骨プレハブ住宅が登場したのか。それは、戦後の特需を背景に基幹産業が軽工業から重化学工業に転換し、冷間形成 [18] の技術向上により鉄鋼企業がその生産力の余剰を向ける先として、当時成長産業として、需要見込みのあった住宅産業に着目したからである。[19]

5-8. 小結

市浦・土浦・蔵田の木造乾式構造が、ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳの「模倣」の域を超えていたのは、当時の日本の生産力・技術力の脆弱さが関係しており、その後の乾式構造の展開でも、この生産力は関係し続けた。そして、**日本では約 30 年後に、ようやく鉄骨による乾式構造が誕生**したことが明らかになった。

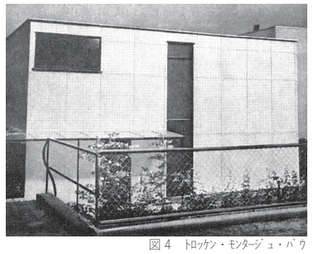
図 4　ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳ

図 5　蔵田周忠肖像

図 6　古仁所邸・蔵田周忠

図 7　安川邸・蔵田周忠

図 8　三輪邸内観・蔵田周忠

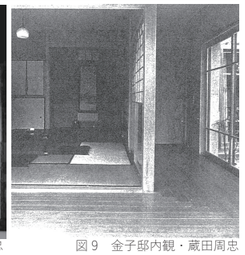
図 9　金子邸内観・蔵田周忠

第六章　考察・民家と工業化住宅の動的把握

6-1. 日本におけるﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳの受容展開過程

前章までの乾式構造における「近代建築思潮」「実践者と実作」「生産力」を基に横断的に考察した。実際は、従来の定説とは異なり、単にﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳを模倣したのではなく、「インターナショナリズムとリージョナリズムの狭間から実践」されていたことが明らかになった。これは、日本でも**表現主義の潮流**においては自明の事実[20]として認識されていたことであるが、合理主義においても実践されていたことが明らかになった。

6-2. 蔵田周忠のｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾘｽﾞﾑとﾘｰｼﾞｮﾅﾘｽﾞﾑ

この動向が特に顕著であったのが蔵田周忠であった。

「日本のインターナショナルスタイルの住宅とされているものが、建築家サイドの独善性論理の産物のようにみえてしかたがなかったからである。（中略）内部空間、その使い勝手、住み易さ、そういうことはすべて**日本の気候・風土と伝統に深くねざしていること**がわかる」[21]

「生活は成長し推移する。**新しい時代の生活に古い民家の形式をそのまま、古を今に適用し再建することが不適當**であることは誰しも氣附かれることに違ひない。（中略）**新らしい時代にはまた新らしい民家の形式が生まれるであらう。**」[22]

「出来るだけ忠實に技術的な基底の上に、自然な、必然な結合を心掛ける事によつて、**眞に新しい時代の日本的なるもの**に到達したい考へは常にもつてゐた。（中略）しかも**古い完成された傳統の姿を再現するのではなくて、現代の材料と手法とに於いて更生を企圖したのであつた。**」[23]

つまり、「単にインターナショナルスタイルの住宅でもなく、古い日本の民家でもなく、これらの両面を合わせ持っている、「新しい時代における新しい民家の形式」としての「住宅－民家－乾式構造」を模索していた」ことが明らかになった。

6-3. 民家と工業化住宅の動的把握

本論冒頭の「民家と工業化住宅の定義」と「日本におけるトロッケン・モンタージュ・バウの受容展開過程の実際」を照らし合せた。（図 10・11 の比較を参照）

［従来の定説］　**ﾄﾛｯｹﾝ・ﾓﾝﾀｰｼﾞｭ・ﾊﾞｳを単に「模倣」した、真新しいインターナショナルスタイルから生まれたものが工業化住宅の始まりとされていた。**

つまり、「民家」と「工業化住宅」の間には関連性がない。

［実際］　**インターナショナリズムとリージョナリズムの両面性から、「新しい時代における新しい民家の形式」としての木造乾式構造を試み、その後もこの両面性を伴って発展した。**

つまり、「民家」と「工業化住宅」の間には関連性がある。

結論

これら動向の代表的建築家である蔵田周忠のインターナショナリズムとリージョナリズムから、日本におけるトロッケン・モンタージュ・バウの受容展開過程の実際に着目することで、「民家と工業化住宅の動的把握」を明らかにした。

［注釈］　[1] 中谷礼仁「近世と近代とはなぜ切れているのか」(『建築雑誌』,1996) [2]B. ルドフスキー『建築家なしの建築』(鹿島出版社,1984) 等 [3]ﾊﾞﾙｰﾝﾌﾚｰﾑ／ﾄﾚｰﾗｰﾊｳｽ／ﾚｳﾞｨｯﾄﾀｳﾝ／ﾌﾗｰﾄﾞｰﾑ／ﾌﾟﾙｰｳﾞｪ／ﾌﾟﾚｺﾝ／剣持昤／池辺陽／広瀬鎌二／等 [4] 日本建築学会『工業化戸建住宅・資料』(彰国社 ,1983) 等 [5] 蔵田周忠「現代建築」『実用建築講座』(東学社 ,1935) [6] 矢木敦「蔵田周忠の論考にみる「近代建築」観の推移について」(日本建築学会大会学術講演 ,1999) [7]『建築新潮』第十年第十一号 (洪洋社 ,1929.11) [8]『国際建築』第八巻・第三號 (国際建築協会 ,1932.3) [9] 同上 ,『国際建築』第九巻・第三號 (国際建築協会 ,1933.3) [10]『建築工芸 IC オール』(洪洋社 ,1933.3) [11] 西村将洋「伝統的最先端の視線」(日本文学協会 ,2003.9) [12] 矢木敦・大川三雄「蔵田周忠の住宅設計活動について」(日本建築学会大会学術講演 ,1997) [13]「蔵田周忠 等々力住宅を中心にして」『都市住宅』No.7307(鹿島出版会 ,1973.7) [14] 矢木敦・大川三雄「蔵田周忠の海外渡航 (1930 ～ 31) と執筆活動」(日本建築学会大会学術講演 ,1998) [15] 今和次郎に師事し、民家研究会に参加。 [16] 丸山泰明「蔵田周忠と民俗学」(神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 編 ,2012.3) [17] 註 13 同様。[18] ｺｰﾙﾄﾞﾌｫｰﾐﾝｸﾞ。軽量形鋼が国内生産可能となる。 [19] 松村秀一「住宅の生産と流通」『都市・建築の現在』(東京大学出版会 ,2006) [20] 藤岡洋保「堀口捨己」『INAX REPORT』No.186(LIXIL,2011.4) [21] 註 13(P.103-104) [22] 蔵田周忠『陸屋根』(相模書房 ,1940) P.49-54 [23]『国際建築』第十二巻・第十一號 (国際建築協会 ,1936.11) P.414

［図版出典］図 1-3・10-13：筆者作成 / 図 4：松村秀一『「住宅」という考え方』(東京大学出版会 ,1999) P.83/ 図 5：矢木敦「13 蔵田周忠 」『建築文化』2000 年 1 月号 (彰国社 ,2000.1) P.124/ 図 6：『国際建築』第十二巻・第八號 (国際建築協会 ,1936.8) P.209/ 図 7：『国際建築』第十二巻・第十一號 (国際建築協会 ,1936.11) P.289/ 図 8：大川三雄「 蔵田周忠」『INAX REPORT』No.177(LIXIL,2009.1) P.7/ 図 9：『国際建築』第十二巻・第六號 (国際建築協会 ,1936.6) P.149

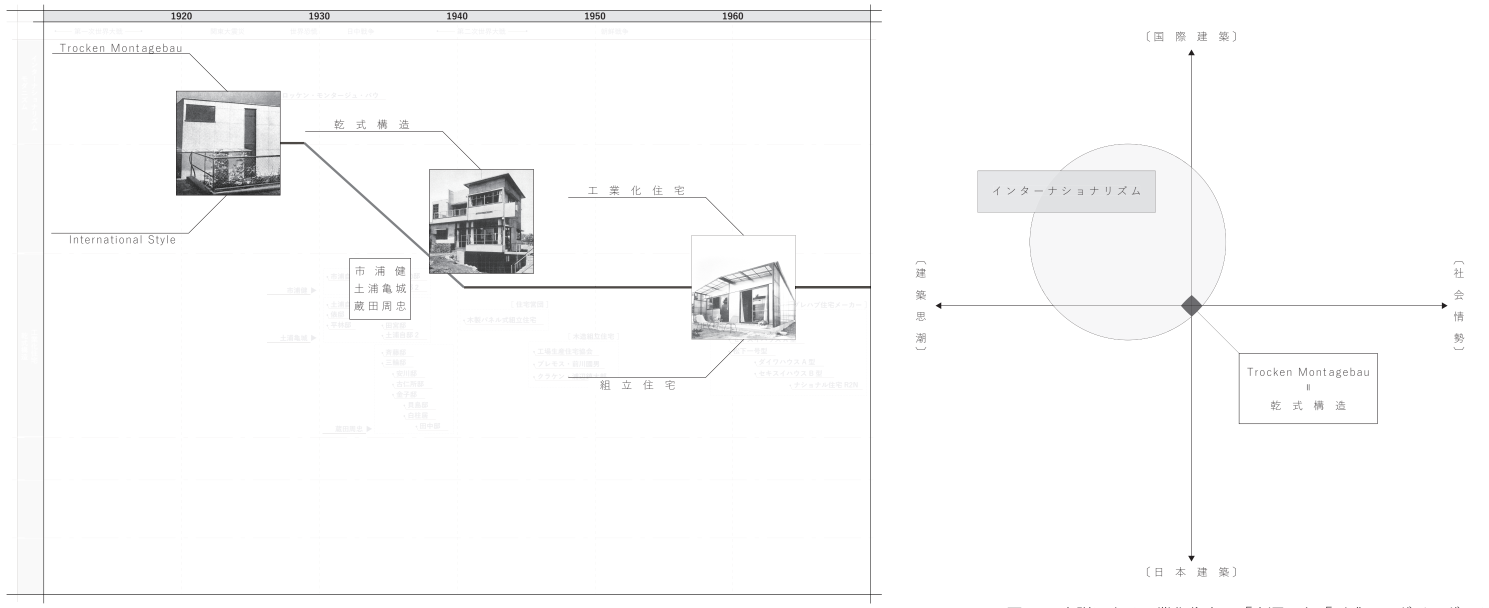

図 10　定説による工業化住宅の「変遷」と「形成」のダイアグラム

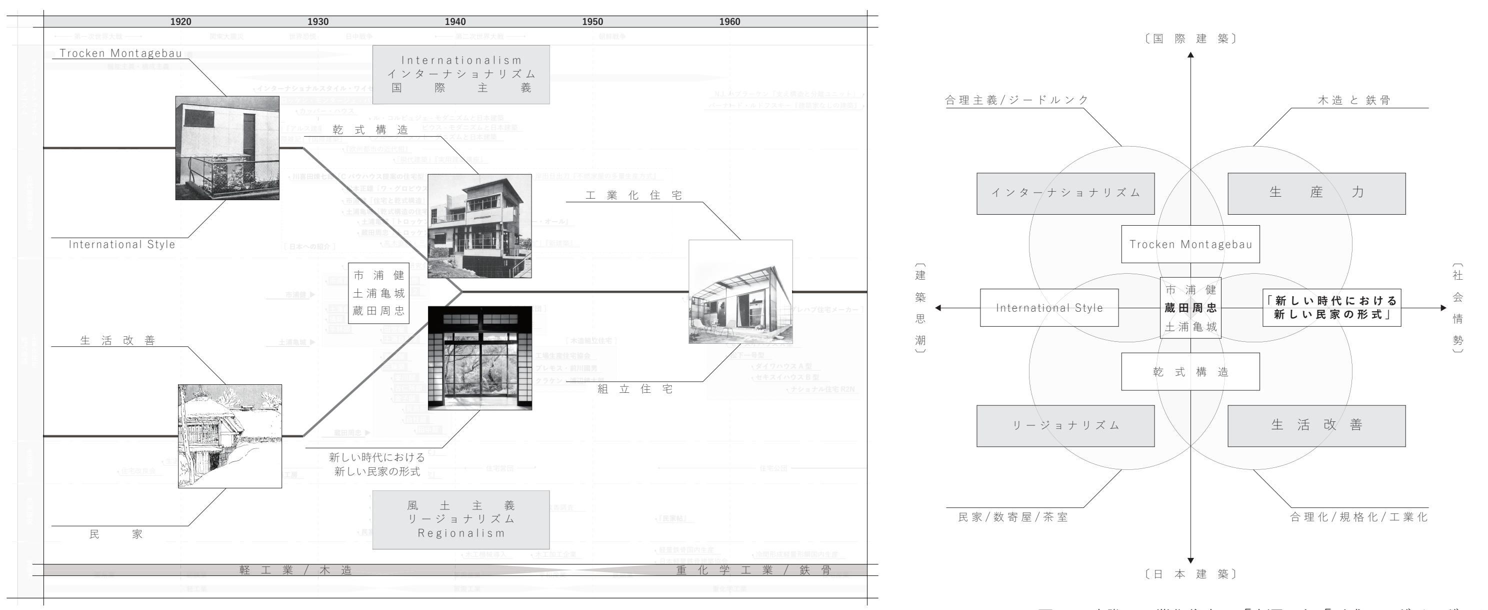

図 11　実際の工業化住宅の「変遷」と「形成」のダイアグラム

	作品	西暦	軸部	外壁	内壁	屋根	目地
グロピウス	Trocken Montagebu	1927	Z型鉄骨	石綿スレート	テックス	陸屋根	パテ
市浦健	自邸	1931	木造	石綿スレート	テックス	陸屋根	パテ
	阿部秀助邸	1935	木造	石綿スレート	テックス	陸屋根	亜鉛釘
	第二の小住宅	1935	木造	杉板割縦羽目	テックス	緩勾配	×
土浦亀城	第一の自邸	1931	木造	石綿スレート	テックス	陸屋根	不明
	俵邸	1931	木造	石綿スレート	テックス	陸屋根	パテ
	平林邸	1931	木造	石綿スレート	不明	陸屋根	不明
	今村邸	1934	木造	石綿スレート	テックス	陸屋根	パテ
	高島邸	1934	木造	石綿スレート	不明	陸屋根	不明
	田宮邸	1935	木造	石綿スレート	不明	陸屋根	不明
	第二の自邸	1935	木造	石綿スレート＋籾殻入	テックス	陸屋根	パテ
蔵田周忠	斉藤邸	1935	木造	石綿スレート＋つば付特殊型	テックス	陸屋根	ジョイナー
	三輪邸	1935	木造	石綿スレート	テックス	陸屋根	ジョイナー
	安川邸	1936	木造	石綿スレート	テックス	陸屋根	ジョイナー
	古仁所邸	1936	木造	石綿スレート＋つば付特殊型＋籾殻入	テックス	陸屋根	ジョイナー
	金子邸	1936	木造	石綿スレート＋つば付特殊型	テックス	陸屋根	ジョイナー
	貝島邸	1937	木造	石綿スレート	テックス	陸屋根	ジョイナー
	白柱居	1937	木造	石綿スレート	テックス	陸屋根	ジョイナー
	田中邸	1938	木造	石綿スレート＋平板	テックス	陸屋根	ジョイナー

図 12　乾式構造による住宅作品の一覧

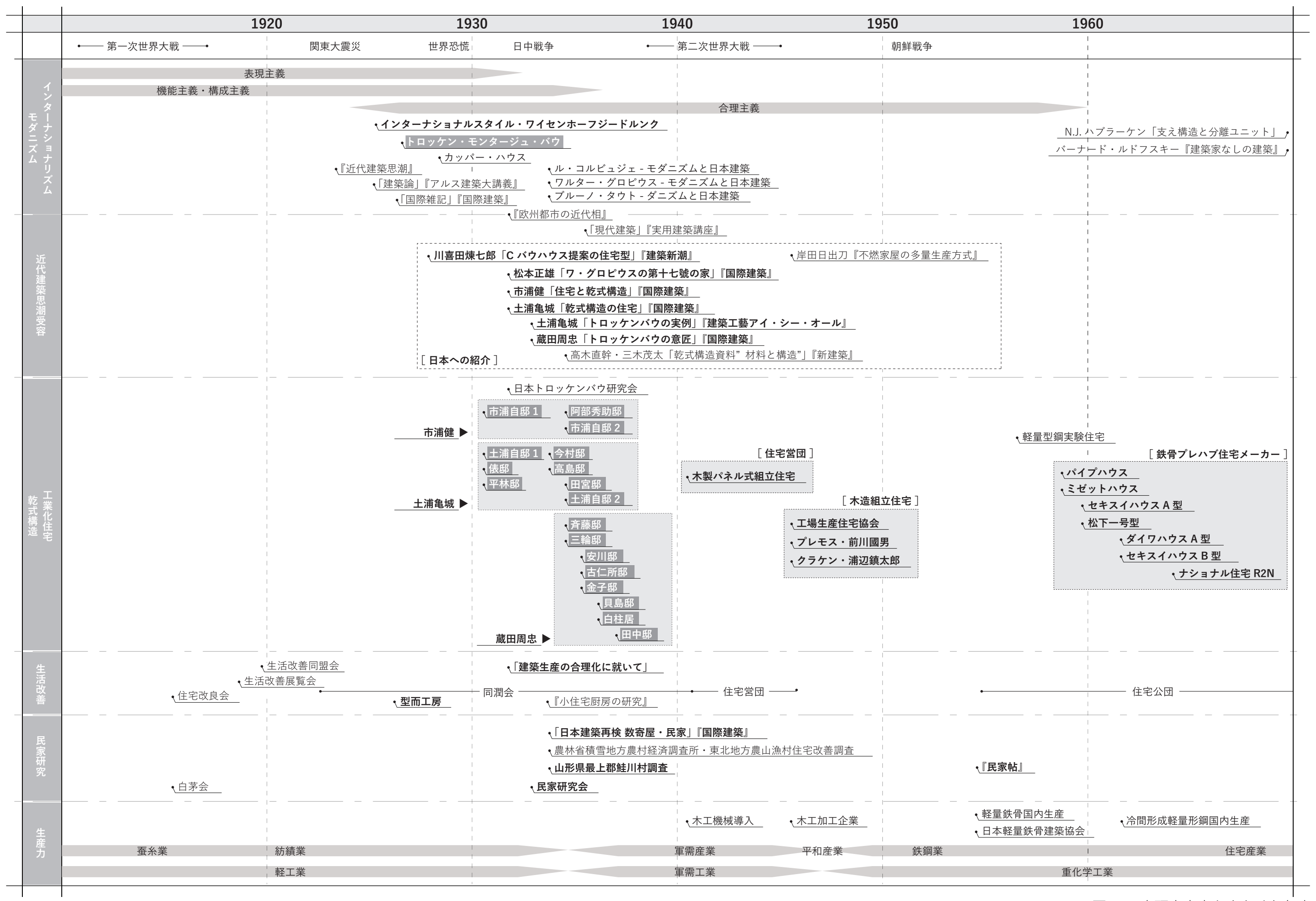

図 13　本研究内容をまとめた年表